

性能

1 性能表

動作特性

TMA 形		0.6形、1.2形、2.5形、5形、10形							
形番	静摩擦トルク [N・m]	コイル(20)				アーマチュア 吸引時間 [s]	トルク 立上り時間 [s]	アーマチュア 釈放時間 [s]	許容 回転数 [r/min]
		電圧 [DC-V]	電流 [A]	抵抗 [Ω]	容量 [W]				
TMAC 0.6	6	24	0.50	48	12	0.020	0.052	0.020	3600
TMAB 0.6						0.016	0.049	0.015	
TMAC 1.2	12	24	0.65	37	15	0.036	0.067	0.028	3600
TMAB 1.2						0.025	0.055	0.025	
TMAC 2.5	25	24	0.92	26	22	0.045	0.089	0.050	3200
TMAB 2.5						0.030	0.064	0.045	
TMAC 5	50	24	1.35	18	33	0.085	0.120	0.060	2800
TMAB 5						0.043	0.074	0.047	
TMAC 10	100	24	1.60	15	38	0.110	0.150	0.086	2500
TMAB 10						0.057	0.095	0.064	

表1

仕事量

TMA 形	0.6形、1.2形、2.5形、5形、10形
形番	使用限界までの総仕事量 [J]
0.6	13×10^7
1.2	25×10^7
2.5	49×10^7
5	88×10^7
10	170×10^7

表2

2 トルク低減率

摩擦形クラッチ・ブレーキのトルクには、摩擦面が相対的に静止した状態で駆動側から被動側へ伝達する静摩擦トルクと摩擦面がスリップ状態で発生する動摩擦トルクがあります。

乾式単板形の動摩擦トルクは、図1に

示すようにスリップ速度が大きくなるとともに減少します。従って、連結時に負荷トルクがかかる場合は、静摩擦トルクではなく動摩擦トルクで考える必要があります。

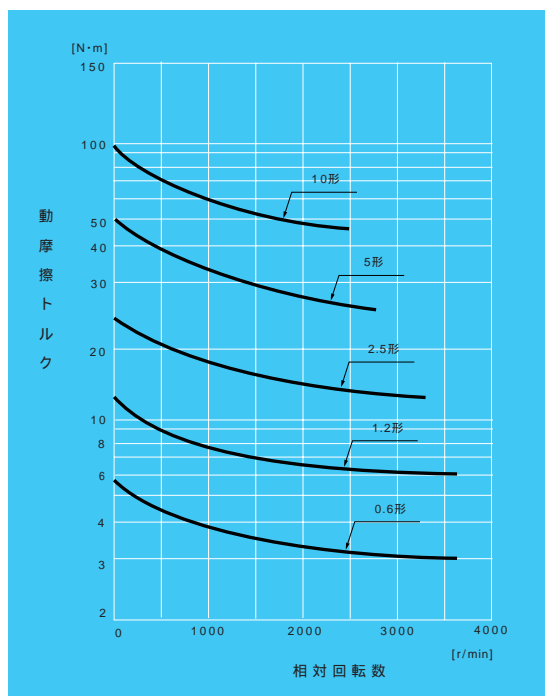


図1

③許容仕事率

摩擦形クラッチ・ブレーキで負荷を起動・停止する場合、連結及び制動の過渡時に摩擦面がスリップ状態となり、摩擦仕事に応じた摩擦熱を発生します。この摩擦熱がクラッチ・ブレーキの熱放散能力を越えると異常摩耗を生じたり、摩擦面が変形したり焼付いたりして使用不能になります。

クラッチ・ブレーキに許容し得る摩擦仕事の限界値を許容仕事率といい、図2に示します。高速・重負荷や使用頻度の高い場合は、選定時に充分検討しておく必要があります。

図2は、クラッチ・ブレーキ単体の場合を示します。TMAU形では、この70%にしてください。

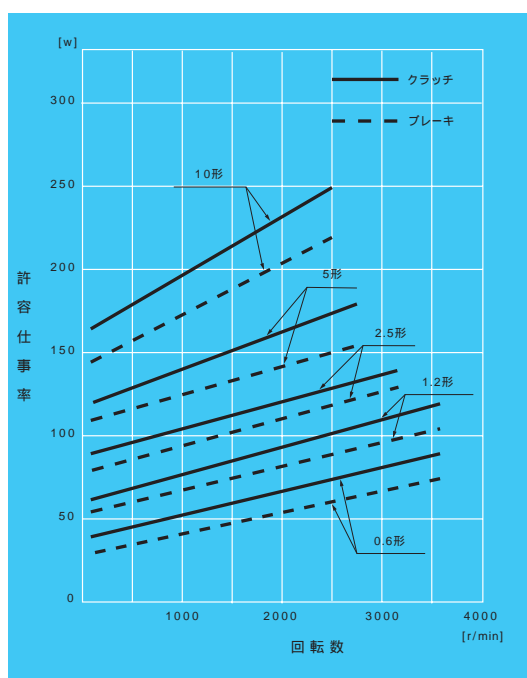


図2